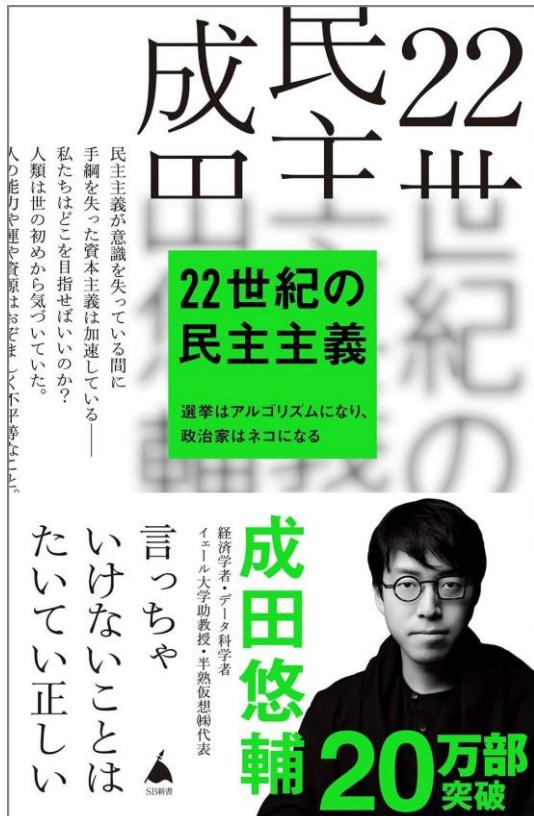




No.90 正義が実現する社会 「22世紀の民主主義（成田悠輔）」を読んで



このところ民主主義は大丈夫かと心配する声が高まっています。資本主義×民主主義こそ国に豊かさと勝利をもたらす、それを証明したのが第2次世界大戦と東西冷戦の結末だ、それをウクライナ戦争でもう一度ロシアや中国に見せつけるのだ、そういう期待を持っている人が多いんじゃないでしょうか。ところがその先頭に立つアメリカもヨーロッパ諸国も足元が怪しい。選挙するたびに分断が深まっている…

政治的的意思決定プロセスとしては欠陥だらけの「選挙」！ しかしほかにどんなやりようがあるか？

この古くて新しい問題に超ラディカルな答を用意しているのがこの本でした。確かに選挙制度を多少改善したところで民主政治の機能不全は解決できそうにありません。マイナリティを含め政策ニーズを的確に政治に反映させるのに、デジタル革命の今なら何か根本的に合理化できるような気がします。ただ選挙を政策選択のためのデータとしてだけ捉えるのは平和な日常に慣れきった発想ではないか、そこまでいくとそもそも人は民主主義に何を求めるのだろうかと疑問になりました。



谷口博文の政策イノベーション

Date :2023年1月5日

選挙はナマの人間が暴力を使わずに人を支配する力を獲得する手段です。

選挙が機能しなければ人は暴力＝軍事力・警察力を使って権力を奪取保持します。ミャンマー、中国、ベラルーシのように…

国の本質は人に対して強制力を持つことです。本人が嫌だと言っても刑罰を課し税を徴収する、それを正当化できるのが国家です。

強制のために物理的な力(暴力)を使う以上、ヤクザやギャングと違って国は正義の味方でなければならない。国は確かに正義の味方だと、国民が確信できるようなシステム、それが民主主義ではないかと思います。

マフィアや軍人が実力支配するおぞましい世界を身近に経験したことのない日本では、政府は悪いことはしないものだと思っている。これは戦後の警察と税務署と自衛隊の努力の賜物ですが、世界中いつでもどこにでもある当たり前のことではありません。政府の公正さに対する国民の信頼を獲得できない世界でこそ民主主義の真価が問われるのでしょうか。

血によって贖ったわけではない日本の民主主義ですが、大事にしたいものです。